溺れる妹を救った愛深き兄の英雄譚

野犬

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

序章

まだ草野梨花が小学生になったばかりのある夏の日、強い雨が降った翌日に友人達と悪ふざけをしていた結果、激流と化した川に落ち、深い水底へと沈みかけていた。友人達は大人に助けを求めに行ったが戻ってこない、だがそれを助けたのが年の離れた兄の草野　英孝だった。

懸命に泳ぎ、梨花を抱き締め、川岸に上げた後、彼は力尽きその激しい川の流れに飲み込まれ、尊い命を失ったのだ。

この話は

ＳＣＰ財団日本支部サイト　ｈｔｔｐ：／／ｊａ．ｓｃｐ－ｗｉｋｉ．ｎｅｔ／ＳＣＰ－２６８－ＪＰ　ｈｔｔｐ：／／ｊａ．ｓｃｐ－ｗｉｋｉ．ｎｅｔ／ｓｃｐ－２６８－ｊｐ
に基づきます
また、クリエイティブ・コモンズ　表示－継承　３．０
（ＣＣ－ＢＹ－ＳＡ３．０）の下、提供されています。

目次

第1章～第3章 ―――― 1
第4章 ―――― 4

第1章～第3章

第1章

未だ慣れない仕事を終え、職場近くの本屋に立ち寄った草野梨花は気がつくと駅のホームに立っていた。あれ、と思う間も無く、後ろから何かに突き飛ばされ、鈍い痛みが全身を襲い、遠くから甲高い警笛の音と近づいてくる強い明かりに晒された。襲い来る痛みに備えるようにぎゅっと目を瞑った直後、冷たい誰かの腕に抱えられ、ホームへ押し上げられていた。

訳も分からず目を開けると、線路の上には自分よりも少し若い、全身びしょ濡れになっている男が微笑みを浮かべてたっていた。男が口を開いた直後、ホームに到着した電車に轢かれ、肉片と化したのをその目に焼き付けながら、草野梨花は意識を失った。

咄嗟の出来事にもかかわらず、身命を賭して彼女を救った彼の行動は正に英雄的であり、素晴らしいものであった。

第2章

未だ慣れない仕事を終え、職場近くの本屋に立ち寄った草野梨花は気がつくと交差点に立っていた。あれ、と思う間も無く遠くから低いクラクションの音と近づいてくる強い明かりに晒された。襲い来る痛みに備えるように彼女はぎゅっと目を瞑った。

草野英孝は気がつくとどこかの交差点の側にいた。自身が溺れた事も、電車に吹き飛ばされ肉片となった事も覚えている。これはどういう事かと困惑していると近くでクラクションの音が聞こえてきた。

まさかと思い其方を見ると、交差点の中央に立つ女性とそれに迫り来るトラックの姿があった。このままでは彼女はあのトラックに轢かれてしまう。彼は反射的に飛び出し、竦んで動けない彼女を突き飛ばし、ヘッドライトの明かりに飲み込まれた。

草野梨花は誰かに押し飛ばされる衝撃で思わず目を開けた。先程まで自分が立っていた場所には見覚えのない、でも何処か懐かしい男が両手を突き出したし姿勢でいた。1日中晴れていたにしては全身が濡れている男にヘッドライトの明かりが近づき、クラクションの音と何かを轢き潰し、砕く音と共に彼女の意識は遠のいた。

咄嗟の出来事にもかかわらず、身命を賭して彼女を救った彼の行動はやはり英雄的であり、素晴らしいものであった。

第3章

未だ慣れない仕事を終え、職場近くの本屋に立ち寄った草野梨花は気がつくと海の只中に放り出されていた。遠くでは大きな船が真っ二つに折れ、深い水底にゆっくりと沈んでいる。パニックに陥り、近くにいる男と同じように大きめの板にしがみつこうとするも足が攣り、その場で暴れるしか出来なかった。昔もこんな事があった気がすると思いながら、彼女の意識は遠のいた。

草野英孝は気がつくと海の只中で木の板にしがみついていた。遠くでは大きな船が真っ二つに折れ、深い水底にゆっくりと沈んでおり、近くにはあの女性がバシャバシャと足掻いていた。足を攣ったのだろうと思いつけば、しがみついていた木の板をもって彼女へと近づいた。彼女のもとへたどり着いた時には彼女に意識はなく、木の板に身体を預けさせると男と女の重量は耐えきれないのか木の板は沈みかけていた。一体何が起こっているのか、男には分からないが、大切な妹を死なせる訳にはいかないと、木の板から自ら手を離し、水底へと沈んでいった。

溺れる苦しさを知りながらも尚、彼女を救った彼の行動は英雄的であり、素晴らしいものである。

第４章

未だ慣れない仕事を終え、職場近くの本屋に立ち寄った草野梨花は気がつくと見慣れない部屋のベッドの上で眼を覚ました。辺りを見渡すとそこは壁、天井、床、全てが白く、部屋の中にある白以外のものといえば木製でできた簡素なベッドと天井に空いている通気口らしき穴、見るからに分厚そうな鉄の扉だけだった。

誘拐されたのかと思い、扉を叩き、声をだすがなにも反応は返ってこない。やがて疲れ果てた彼女はベッドへと腰掛けて自身を此処に連れてきた誰かが訪れるのを待っていた。

草野英孝は気がつくと見慣れない部屋のベッドの上で眼を覚ました。辺りを見渡すとそこは壁、天井、床、全てが白く、部屋の中にある白以外のものといえば木製でできた簡素なベッドと天井に空いている通気口らしき穴、見るからに分厚そうな鉄の扉、壁に付いている赤と青のボタンと２０インチ程の壁掛けディスプレイだ。

「いったい、どうなってるんだ」

思い返せば、年の離れた妹が川で流されているを助け、自分は力尽きて死んだはずな

のだ。それが気がつけば成長した妹が何かしらの危機のある場面に立ち会い、それを救ってまた死ぬ。電車、トラック、海、と三度だ。自身は妹の守護霊にでもなったのだろうか、なんて非現実的な事を考えていると無機質な声がディスプレイに備え付いているらしきスピーカーから声が聞こえてきた。

「これより、実験の説明をはじめます。実験開始の後、毒ガスが２つの部屋に流れますので被験者Ａは下の青と赤のボタン、どちらかを押してください。」

そんな声が聞こえると同時、なにも移していなかったディスプレイに映像が表示される。そこには彼がいる部屋と似たような部屋に閉じ込められている女性が映っていた。

「これはなんだ！　おい、ふざけるな！」

「青のボタンは被験者Ａの、赤のボタンは被験者Ｂの部屋に流れる毒ガスが止まります。この毒ガスは５分程度吸い込むことで致死量となります。途中で別のボタンを押すことで毒ガスの流れを変えることも可能です。被験者ＡかＢ、どちらかの死亡をもって実験を終了とします。」

彼が声を荒げても無機質な声は淡々と内容を説明するのみだ。ディスプレイに映る部屋にはボタンが見当たらないあたり、どうやら被験者Ａは自分の事なのだろうと彼は朧気に理解した。

「それでは実験を開始します」

無情にも告げられた言葉と共に、天井の穴から小さく音が聞こえてくる。臭いも色も無いあたり、説明を受けていなければ毒ガスが流し込まれているなんて気が付きはしないだろう。現にディスプレイの部屋の彼女はベッドに腰掛けてただ何かを待っている。このまま青いボタンを押せば、彼女は何が起こったのか分からないまま、死ぬ事だろう。

「くそっ！」

忌々しげに悪態をつきながら、彼はボタンを押した。

ベッドに座ってから少し経つと、体が気だるく感じてきたので横になる事にした。横になってからすぐ、鼻の奥がむず痒いと思ったら、鼻孔から血がドロリと流れ出た。咳が止まらない。咳の度に喉の奥から血が込み上げてくる。

頭痛に頭を抑えれば、何の抵抗もなく、髪が指に絡まり抜け落ちた。

体の内側から、破壊されているのを感じながら、意識が遠のいていった。

壁に掛けられているディスプレイには一人の女性がベッドで横になっている姿が確認される。彼女の表情は安らかで、深い眠りについている様だ。

ディスプレイが掛けられている部屋のベッドには一人の男性がベッドで横になっていた。彼の表情も安らかで、深い眠りについているように動かない。

ただ、決定的に違うのは、彼のベッドは真っ赤に染まっており、周囲には彼の髪が散乱している事だけだ。

彼は彼女に認識されないとしても、自身を犠牲とし彼女を救う事を選んだのだ。それは誰にでも行う事が可能なものではない、英雄と呼ぶに相応しい行動である。